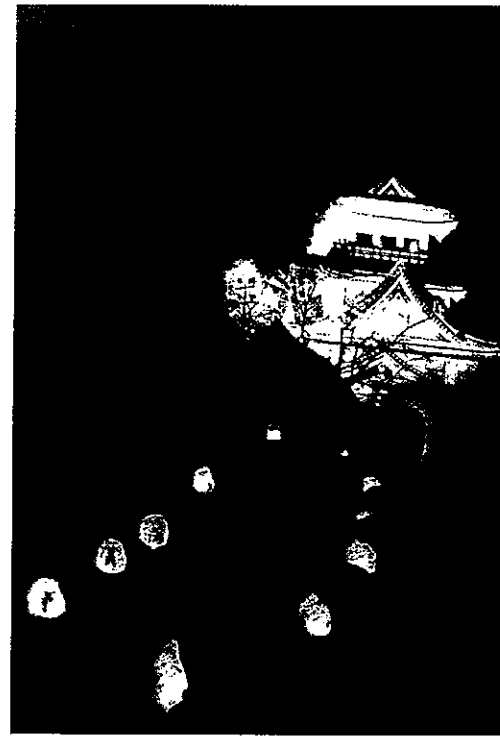


秋田は明るい癒しの風土で「観光立県」を

勝又美智雄



横手市の雪まつり

写真はすべて秋田県観光課提供

秋田に住んで今春で丸3年になる。東京の大学を出てから32年間は、新聞記者をつとめ、東京本社に28年、スタンフォード大学とロサンゼルスに計4年住んだ以外は、ずっと横浜住まいだった。初めての東北生活だが、四季折々の自然の美しさと今に生きている伝統文化と祭礼の魅力、食べ物と日本酒の美味しさ、そして何よりも人の心の温かさに触れて、毎日、快適に過ごしている。

秋田市郊外に開学した大学で、全国から集まった優秀な学生を教えるかたわら、秋田県内をほぼ限なく駆け回って、数え切れないほどの人たちと親しくなっている。秋田の国際化、地域の活性化について一緒に議論し、県の観光政策を見直す委員会の代表を務めて報告書をまとめた。そうした体験から東北の魅力、秋田の個性的な面白さがかなりよく見えてきたので、ここでその一部を紹介したい。

秋田は隣接県よりPRが下手!!

秋田で生活し始めて、最初に覚えた表現のひとつが「なんも、なんも」だ。

県内のいたる所にある自然の景観、天然温泉、食事や酒のうまさなどを褒めると、必ずと言っていいほど即座に返ってくる言葉がこれだ。

手を顔の前で何度もヨコに振って、「何もたいしたことない」と言うわけだ。

そうか、地元の人が卑下するほどだから、たいしたことないのか、と思つて、あまり期待しないで実

際に行ってみると、これが実に素晴らしい景色や風物で見とれてしまう、ということがよくあった。

「とてもよかったですよ」

「そうかね。他所にもいくらでもあるでしょう」

半信半疑で、お世辞半分の社交辞令、と受け止めていた。

こうした体験を何度も繰り返して痛感するのは、秋田県人は自分の故郷の宣伝が下手、ということだ。これは東北の中でも際だつている。

隣接する青森、岩手、山形、宮城は、どこも他

所から来た人には熱心に「お国自慢」をする。東北6県に入る福島にしても、「故郷」の売り込みに特に熱心だ。

関東から西の人たちにとっては、十和田湖に白山山地といえば青森、八幡平といえば岩手、鳥海山に栗駒と言えば山形、という印象が強いだろうが、どれもその半分近くは秋田県内にある。秋田が自慢してもいいものなのだが、隣接3県の方がはるかに熱心にPRしている。

秋田は全国で3番目に温泉の数が多く、しかも湯質がいい、ということも来てみて初めてわかつ

た。県内のどこに行つても、いい温泉を気軽に楽しむことができる。だがそのPRとなると、岩手、山形、青森の方がはるかにうまい。

杉、鉾脈、北前船に恵まれて豊かで鷹揚

なぜ、秋田が東北の中でも「宣伝下手」なのか。その理由を調べてみると、歴史的な背景が浮かび上がってきた。秋田は江戸時代から東北では最も経済的に恵まれていたのだ。

秋田・佐竹藩は、安土桃山時代には、常陸の国(茨城県)で54万石の大大名だったが、秀吉に領地を安堵されていて関ヶ原の戦いでは中立を保つたため、徳川家康に警戒され、秋田20万石に左遷された。それでも東北では伊達(仙台)62万石、松平(会津)28万石に次ぎ、水が豊富な新田開発によつて実際には35万石以上あるとみられていた。

その上、秋田杉という良質な林業を持ち、金銀銅の鉱脈が豊かで鉾山業が全国一に栄えた。さらに関西と蝦夷地を結ぶ日本海の北前船の主要中継基地として、能代・土崎・秋田の港を擁して、秋田は商業的にもにぎわっていた。

東北地方は昔から冷害と凶作に苦しんだ。江戸中期の天明(1783~88年)、天保(1836ごろ)の大飢饉の時には数万から数十万人の餓死者を出したが、秋田の餓死者数は周辺地方の10分の1程度で済んでいた。その理由は秋田の領民のコメの摂取量が、周辺諸藩の領民に比べると10倍あつたからという。

当然、周辺の農民は、飢饉の時には秋田に行け

ば何とか食える、と逃げてこようとする。秋田側はよそ者に食糧を奪われたくないから、追ひ払おうとする。

幕末期に徳川幕府に忠誠を誓う奥州列藩同盟ができたとき、徳川の恩を感じていない秋田はいち早く脱退して官軍側につく。

その結果、庄内・仙台・南部など隣藩から猛攻撃を受け、戊辰戦争では全国諸藩の中でも最も大きな被害と大量の犠牲者を出した。それもむべなるかな。貧しい近隣藩には、「豊かな秋田」への積年の妬み、恨みが重なつていたからだ。

そこで驚きあきれることには、明治新政府になつたとき、薩摩や長州をはじめ官軍方について諸藩が競つて論功行賞を求め、政府内の官位獲得に奔走したのに対し、秋田藩は何も求めなかつたのだ。

自己PRなど考えない。きわめて非政治的であり、鷹揚でもあつた。当然のように秋田は新政府から「蚊帳の外」に置かれ、何の優遇措置もないどころか、事実上、無視され続けた。欧米列強に直面して「開国」を急ぐ明治政府にとっては、東北は平定しさえすればよい。そのため秋田の貢献など眼中になかつたと言える。

ネアカ。性善説。自足。「いいふりこぎ」

明治から、昭和の初めまで、東北は「白河以北一山百文」と蔑称され、近代化の外に置かれていた。その中で唯一と言つていいほど、秋田は天然資源に恵まれて、繁栄を続けた。

十和田湖畔の小坂銅山と小野小町伝説のある雄勝郡の院内銀山は、それぞれ日本一の銅、銀の産出量を誇り、北秋田の阿仁鉾山や鹿角の尾去沢鉾山も含めて、日本の近代化の原動力となる鉱物資源を生み出していた。

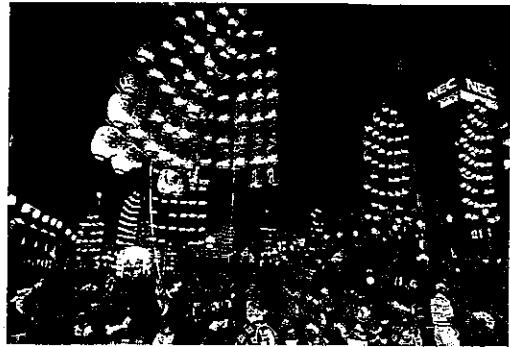
その豊かさに支えられて四季折々の祭礼が華美に、賑やかに行われ、秋田はお祭り、踊り、民謡の宝庫となつた。秋田市内には全国でも有数の歓楽街ができ、旅芸人一座が次々に訪れる。相撲などの巡業もさかんで、都の文化が流入してきた。

明治から昭和の初めまでは、秋田から東京などへ「出稼ぎ」に行く人よりも、むしろ近隣県や関東、関西からも、その豊かさに惹かれて秋田に出稼ぎに来る人たちの数の方が多かつたという。

わざわざ外に出かけなくても、別に自慢しなくても、ヒトもカネも情報も文化も集まってくる。



世界遺産に指定されている白神山地



秋田市内の竿灯祭り



男鹿半島のなまはげ祭り



県内各地で賑わう朝市



冬の郷土料理「きりたんぼ鍋」



県内至る所にある天然温泉

政治的に人と争う必要もない。

普段いいものを食べ、いいものを身につけているからこそ、見慣れたものがそれほどいいとは思えず、何でも「たいしたことない」と思ってしまう。そうした居心地の良さが秋田の県民性を育ててきたのではないか。

その特徴を私なりにまとめると、次の5点があげられる。

- ① 性格は明るく、優しい。基本的にネアカ。よそ者にもあまり警戒心を持たず排他的ではない。誰でも気軽に、気持ちよく受け入れる。性善説で人を見る。
- ② 人と争うのを敬遠する。会合ではまず酒を飲んで和やかに。あまり理屈っぽく議論するのを嫌う。競争心に薄く、協調精神が強い。ただし人付き合いは淡泊で、ベタベタせず、さらつとしている。
- ③ 人に頼らない。自分の力でまずまずの生活ができればいい、と自足している。現状肯定派が多く、どんなハングリー精神はない。中央(政府)への依存心も少ない。

④ ちよつとまうまいかなと、すぐあきらめる。あるいは白紙に戻して最初からやり直そうとする。失敗にもめげず、ねばり強く頑張るという執着心、辛くても我慢して続けていくという持続心に薄い。

同郷で優れた人が出ると、皆で応援して中央で出世させ、どつさり補助金や公共事業を持って来てくれるのを期待する。原敬から小沢一郎まで、実力政治家を育ててきた岩手がその典型だ。それに対し、秋田には昔から大物政治家が育たない政治風土がある。

大物政治家が育たず、「おしん」もいない

同じ東北地方でも、貧しさに苦しんできた岩手、青森、山形は、秋田の県民性と対照的だ。そこでは、よそ者に対しては「自分たちから何か取って行くのではないか」と警戒し、まず他人は信用できないという性悪説に立つ。ネクラで、その分、いったん親しくなれば、家族同様な濃密な付き合いを期待する。「ウチ」と「ソトヨソ」の違いを区別して、近隣同士でも競争心が強く、協調心は薄い。

岩手なら宮沢賢治に石川啄木。青森なら棟方志功に太宰治、寺山修司。山形なら上杉鷹山に藤沢周平。それぞれ「わが故郷の誇り」と県内のあちこちで顕彰し、県外にも積極的にPRに努めている。だが秋田では、それに匹敵するような人物が多数いるのに、せいぜい県内でちんまりと顕彰する程度で、全国的にPRしようという意欲も見られない。

「もう一杯」と乾杯するのが秋田県人なのだ。

大学で「国際観光立県」のため委託研究

地域経済の低迷が続く中で、秋田が県政の最重要課題に掲げているのが「観光立県」である。それに少しでも応えようと、私は05年に国際教養大学の同僚教員約10人のボランティアを募って、「秋田を国際観光立県にするにはどうすればいいか」を研究することにした。テーマはまず5点。

- ① 外国人観光客が秋田に期待するのは何か。
- ② 台湾や韓国の観光客をどう呼び込むか。
- ③ エコツーリズムのあり方。
- ④ 田沢湖の周辺を国際的な学術会議センターにするための仮想実験(シミュレーション)。
- ⑤ 茅葺き古民家の有効な再生・利用策。

これには県の国際交流協会が、委託研究の形で研究費を出してくれた。それぞれのチームは現地調査、関係者の聞き取り調査をもとに、政策提言をまとめることにした。

05年秋に公開講座の形で一般市民に発表すると、たいへん好評で、地元マスコミでも大きく取りあげられ、県庁、県国際交流協会から継続調査

が特に気に入って足繁く通うのは田沢湖に近い夏瀬温泉で、その名も「都わすれ」という。



Michio KATSUMATA

国際教養大学の教授(アメリカ研究、日米関係論)、図書・情報センター長、広報委員長、地域貢献委員長。72年、東京外国語大学英米語科卒。日本経済新聞社に入り、社会部記者14年の間に長期連載「サラリーマン」取材班で菊池寛賞受賞。87年～90年までロサンゼルス支局長。その後、国際第二部長、営業推進本部国際担当部長、編集委員などを歴任して2004年3月末に退社。

81年に米スタンフォード大学ジャーナリズム研究員。95年～03年、東京外国語大学非常勤講師(アメリカ研究、国際関係論、98年以來、留学生課程で「日本事情」を英語で講義)。03年、神戸大学非常勤講師(ジャーナリズム概論)

【主な著書】 J・W・フルブライト「権力の驕りに抗して—私の履歴書」(訳・構成、日本経済新聞社、1991、文庫版を2002年刊) [JAPAN ECONOMIC ALMANAC 1992、1993年版] (責任編集、日本経済新聞社) 『ビジネス新語英訳事典』(責任編集・共著、日本経済新聞社、1994) ニコラス・バラン「情報スーパーハイウェイの衝撃」(訳、日本経済新聞社、1994)

Professor of American Studies, Director of Library & Information Center, Akita International University. Formerly Reporter-Editor with the Nikkei Newspaper for 32 years.

を依頼された。そこで今は、07年度までの3年計画として調査研究を続けており、07年度中にまた公表し、報告書にまとめる予定だ。地域起こしの基本は、そこに住んでいる人たちが郷土に誇りを持ち、自分たちが毎日の生活を楽しんでいることにある。単に観光客目当てで商品をつくっても、思いつきのイベントをやっても決して長続きはしない。

秋田には、伝統に支えられた祭礼行事がたくさん今に生きている。土崎の曳山祭り、角館の山車ぶつけが、観光客を惹きつけるのはそこだ。都会から急速に失われつつある「故郷」が、ここにはまだまだたっぷりある。

「退職する都会の団塊の世代を呼び込もう」といまや全国の自治体が競っているが、都市生活で疲れた心身を癒してくれる場所、土地柄であることが何より重要だ。その点、秋田はその県民性からも、よそ者が移り住んでもいかに住み心地がいいか、ということがよくわかるだろう。

ちなみに、私も団塊の世代の一人である。私

の台数と、自殺者の数。酒が好きで飲み歩き、いい格好ができなくなると、あっさり自殺してしまう、という構図だ。自殺者で多いのは50、60代。近隣県なら、石にかじりついても貧しさからはい上がるのに必死で、そう簡単に世をはかなんだりはしない。「おしん」は山形出身という設定だったが、秋田には「おしん」はいない。

同じ東北人でも県民性は異なっている。それは私に次のように戯画化してみた。岩手は人を乗せる政治的な能力に長けているので、「俺が応援するからお前やれ」。

山形は自分しか頼る者がいないという覚悟で挑戦する意欲が旺盛なので、「俺がやるからお前も手伝え」。

青森は東の南部領と西の津軽領の対立が長く続いたが、平成に入ってから遅ればせながら、官民一体で頑張らなければ、という気力が強く出てきたので、「俺がやるからお前もやれ」。

それに対して秋田は現状打破、改革への基本的な切実感に乏しいので、「俺はやらぬからお前もやるな」。

こんなマンガチックで自虐的な表現に、別に怒るわけでもなく、「たしかにそうだ」と大笑いして